

# 学生から見た現代中国学部

## 中国武術で国際交流

泉 憲佑 (第6期生)

私は高校時代に中国武術の存在を知り、今までに見たことのない独特な世界観に魅了され、中国武術を学び始めました。高校時代に愛知大学中国武術部の張成忠先生に出会い、先生のご指導の下で中国武術の基礎や知識などを学びました。

その後、スポーツ推薦で愛知大学に入学し、授業と武術の練習の文武両道で大学4年間を過ごしました。4年間、愛知大学の素晴らしい練習環境と、日本人では教えることのできない張成忠先生の高度な技術や本場の中国武術の思想などを学べたおかげで、2006年に全日本選手権大会に出場し、槍術2位などの成績を残すことができました。さらに、部活動で先輩から指導していただき、また、後輩に指導する経験をする事で人との付き合い方や礼儀なども学ぶことができました。

それに加え、現代中国学部の授業内容は素晴らしく、現地プログラムで実際に中国の天津で生活することで本物の中国に触れることができ、中国語の習得や中国という国とはどういう国なのか、日本と中国の関係はどういったものかなど、いろいろな知識をも深めることができました。さらに、課外活動として天津の南開大学の武術部の方々と一緒に練習し、本場の技術を学び、中国の方々と国際交流することができたこ

となど、今思いだしてもとても有意義な時間を過ごしたと感じます。

卒業が差し迫り就職活動の時期を迎え、自分が将来何をしたいのかを考えた末、若い時にしかできないこと、大学時代に学んだことをさらに深く学びたいという二つの目的から語学の習得と武術のレベル向上のため、そして世界に出ていろいろなものを見てみたいと思い、中国へ留学することを決め、南京に行くことを決めました。

現在南京で、午前中は語学の勉強、午後は武術の練習という生活を送っています。南京に来てからすでに1年と少し経ち、語学も日に日に上達し、中国武術も本場の中国の環境、雰囲気、文化の中で練習し、日々努力を続けています。2007年に中国で大会に出場し、1位を獲得することもできました。現在、南京で生活している状況、中国武術の技術、中国語の基礎や海外生活で役に立つ知識の基盤などは、すべて愛知大学在学中に培われたものだと思います。もし愛知大学に入学していなければ、ここまで武術に打ち込むことはできなかつたろうし、成績を残せるほどの実力も付かなかつたでしょう。海外まで出て語学を学ぼうとも思わなかつたと

思います。今の状況を与えてくれたのは愛知大学の素晴らしい環境、素晴らしい先生方のおかげだと感謝しております。

2006年3月卒業。南京師範大学に武術留学中。中国国内大会にて双刀一位となる



## 「珍奇」なる現代中国学部

神谷 敦〈第6期生〉

現代中国学部とは「珍奇」な学部であると思う。もちろん、現代中国学部というのは日本で唯一愛知大学にだけ存在する学部であるし、そのカリキュラムも独特であるこ



とがこのように考える所以だ。学部の同学年全員が1学期にわたり海外で共同生活し、学習を共にする学部など他に聞いたことがない。しかし、この「珍奇」さがこの学部の魅力でもある。中国語の「珍奇 (zhēn qí)」という単語は「珍しい」という意味の中に「貴重だ」という意味も包含している。珍しいこと＝貴重なことだというわけだ。自分は正にこの意味で「珍奇」という単語が、我が現代中国学部を表すのにピッタリであると思っている。

私はこの「珍奇」な愛知大学現代中国学部になんと6年もの間在学し、この春に卒業する。通常の人よりも2年間長く現中に所属した私にとって、この学生生活は通常よりさらに珍しく貴重であったと言えるだろう。この学生生活で体験した貴重なことでパッと思いついたものを挙げてみる。現地プログラムが中止に迫り込まれたSARS騒動、2年間の北京留学中に勃発した反日デモ、同時期に流行した鳥インフルエンザ騒動、さらには小泉元首相の靖国参拝……。奇妙な巡り合わせと言おうか、ここ数年の中国の大きな出来事をすべて現地の中国で体験することができた。この中国のみならず世界も騒がせた事件に現地で遭遇し状況を目の当たりにできたことは、中国学を学ぶ者として非常に有意義で「有意思」(中国語で面白いの意)であった。これらの体験がすべて現中のおかげであるとは言えないが、私が現中生であったからこそ体験できたことだろう。

現代中国学部が現地プログラムを実施している理由の一つに、学生たちが日常の教室で学習していることを中国現地でリアルに実感させるということがあるだろう。私は見事にこの現中の策略に嵌り、現地プログラムだけでは飽きたらず自費で中国に留学するような学生になったわけだ。現中が目指す「問題が山積する日中両国の架け橋の役割を担い得る優れた人材」に自分がなれたかどうかは未だに疑問であるが、現中の教育カリキュラムはそのような人物を生み出すことが可能な学部であると自信を持って言える。現代中国学部生としてそのカリキュラムを受けてきた私が言うのだから間違いない(はず)。

現代中国学部は2007年で10周年を迎えたばかりであるが、この10年の間に「特色ある大学教育支援プログラム」(2003年)、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(2007年)として文部科学省に採択された。言わば愛知大学現代中国学部は国にも認められた珍奇な学部になったわけである。私はこの珍奇な学部の卒業生として、誇りを持ってこの珍奇な学部をこれからも陰ながら応援させていただきたい。現代中国学部に万歳、万歳、万々歳!!

2008年3月卒業。2004~2006年北京語言大学留学。現在、中部国際空港セントレアにて勤務

## 現代中国学部に学ぶ

佐藤一道〈第10期生〉

私は2006年度(平成18)社会人入学した2回生です。現在59歳、僧侶です。私が何故、愛知大学現代中国学部で学ぼうとしたのか、そして入学以来2年間で具体的に何を学んだのかについて述べます。



1996年4月19日、私は名古屋市公会堂の2階椅子席に座っていた。『ワイルド・スワン』の著者ユン・チアン（張戎）の講演を聴くためである。その会場で新中国成立から文化大革命終息までの時代を生きた著者の生の声を聞くことができた。ただ残念なことに、私は中国語がわからない。講演が終わり、会場を出るとき心の底から中国語を学びたいと思った。またパンフレットを見て、この講演会を主催したのは愛知大学であることを知った。

その後、私は町にある中国語教室に通いはじめた。また、愛知大学の名前を知ってから新聞紙上で愛知大学の記事が目にとまるようになった。そのとき、愛知大学が日本で初の学部「現代中国学部」を新設することを知った。当時の石井吉也学長が「国際的教養と視野をもち、世界文化と平和に貢献する人材を育成したい」と抱負を述べた記事を読んだ。また、加々美光行教授の「総合的に現代の中国を理解することが現代中国学部を新設する精神である」との記事も読んだ。中国に関する政治・経済・歴史・法律・言語・文化・国際関係を総合的に学ぶことができる学部は私にとって魅力的だった。

しかし私には寺の勤めがあり且つ社会的に果たさなければならない役目があった。愛知大学に学びたいと思いつつ、その思いをかなえることができないまま10年の歳月が経った。それでも、その間に中国人留学生の身元保証人になったり、台湾の仏教寺院と交流して、わずかに中国語習得の意欲を維持していた。そして町の中国語教室にも通い続けたが、成果は上がらなかった。そのとき友人から「深い穴を掘るには広く掘れ」と言われた。そうか、中国語をマスターできないのは、中国語が通用している中国全体を知らないからだ。そしてもっと根本的に私は中国語を学んで何がしたいのかと自ら問うた。

近来、日中関係は必ずしも良好と言えない。その原因はお互いに相手を理解しようとしな

姿勢にある。遣隋使・遣唐使の時代以来、私たち日本人は中国からあらゆることを学んできた。仏教徒の私は特に中国仏教の禅に影響を受けている。しかし、風土の違いや長い歴史を経るうちに、それぞれの国に住む人の価値観や思考方法に違いが出てきた。当然である。当然であるなら価値観や思考方法の違いは対立の原因とならないはずである。むしろ相互対話のなさが日中間の信頼を妨げていると思う。私は中国語を学んでその溝を埋めたいと思った。また総合的・科学的に中国と向き合う必要性をひしひしと感じた。科学的に研究理解しないかぎり各自の立場に固執し、自分に都合のよい過去は誇張し、都合の悪い過去は過小評価する間違いを犯すことになるからである。40年前、私が大学に入学したとき中国では文化大革命の初期であった。日本に伝えられる情報量の少なさから私は文化大革命の実態を誤解していた。最初にかかげたユン・チアンなどの著作を読んで文化大革命の実態をやっと理解したほどである。また卒業前後の1970年に示された平和運動の盛り上がりは後退したとき、私もその時流に乗ってしまった。そのときのことを反省すると、中国が好き、中国が嫌いではすまされない問題がそこに横たわっていると思った。ますます愛知大学現代中国学部で学ぶことが必要だと感じた。

2005年の秋、家族や地域の人々の理解と協力を得て、寺の勤めと学業が両立するなら大学へ行ってもよいと認めてもらった。さっそく入学志願書を提出し、試験を受けて2006年度に入学した。

入学式を終え1週間ほど経ったとき、私はひとつの発見をした。ピロティエを通り東教室棟に向かう左手に二本の柱と小さな鐘を見つけた。一本の柱には「自由」、他の柱には「受難」と書かれていた。そしてその傍らに「愛知大学設立趣意書」が石に刻まれていた。

「新日本ノ進ムベキ方向ハ旧来ノ軍国主義

的・侵略主義的等ノ諸傾向ヲ一擲シ、社会的存在ノ全領域ニ亘ツテ民主主義ヲ実現シテラフ文化、道義、平和ノ新国家トシテ再建スルコト」とあった。

友人が言った「深い穴を掘るには広く掘れ」の実践はここまで及ぶことに気がついた。幸い、愛知大学には総合科目「平和」の講座があったので受講した。

20世紀は戦争の時代と言われた。否、過去の話ではない。21世紀に入ってすら日本は戦争に関わり続け、米国が主導した戦争の後方支援を続けている。これらの直接的暴力による脅威に加えて、環境汚染・国際テロ・大規模な人口移動・感染症などの間接的暴力も広がっている。この暴力の実態を見つめ、その上で全世界の国民が等しく暴力の恐怖から免れ、平和のうちに生存するにはどのようにしたらよいか。自ら考え行動する基盤を得るため13回に亘ってさまざまな分野の専門家の講義を受けることができた。

人類が現在まで存続したのは多様な文化を持ち得たからである。もし地球上が単一文化となったならば、すなわち対話すべき他者がいなくなったならば、私たちに残されているのは衰退と自己破滅のみである。他者とは敵意を抱く対象ではなく、他者の存在こそが自己の存在にとっての必要条件なのである。多様な文化（他者と自己）が出会い、刺激し合い、吸収し合い新しい文化を誕生させることが平和への道である。総合科目「平和」でそのこと学んだ。

中国語は1年次に10単位、学んだ。発音・文法・精読・ヒアリングなど充実していた。特に有用だったのは、コンピュータによる中国語入力を学んだことである。これにより中国の検索サイトを自由に渉猟することができるようになった。

中国研究入門Ⅰ・Ⅱでは学問の基本姿勢を学んだ。かつて私が学ばなかった近現代史は日中戦争史で学ぶことができた。中国の思想概説や

文学概説は大づかみであるが、かえって流れが理解しやすかった。現代日本社会論は中国を鏡として照り返された日本を知るうえで有益だった。私をはじめて中国の教授から習ったのは日中関係論である。日中関係論の馮昭奎教授は「日中関係を促進する六つのポイント」という講義の中でつぎのように話された。二国間の矛盾に冷静に対応し、客観・公正・真実に相手国を見る。そのように理性的な態度を取れば相互理解が促進できる。ささいなことを大げさに取り上げ、異なる意見にレッテルを貼り排除する。そのように非理性的な態度を取れば相互理解を妨害するだけではなく、大きな誤解を招く。したがって日中関係を良好にするひとつは「理性」を以って「理解」を促すことだと講義された。私が今後、愛知大学で学んでいく方針を馮教授の講義の中に見いだした。情報リテラシー入門・応用、ソフトウェア演習、社会データ分析入門を受講したことは、現代社会にあふれる情報を整理・活用するときに役立つと思う。時代に即した講座であった。そして1年次秋学期には現地プログラム基礎と現地プログラム生活の講義を受けた。これこそ2年次春学期に中国天津の南開大学で実施される教育の基礎作りであった。私が愛知大学に編入学でなく1年次から入学したのも、この南開大学での教育を受けたかったからである。

2年次春学期、3月9日から7月3日までの117日間を南開大学で過ごすことができたことは私にとって最も有意義であった。南開大学内に建てられた愛大会館の設備は充分すぎるほど整っていた。朝起きれば、食堂に暖かい朝食が準備されており、5分も階段を上れば教室に到着し講義を受けることができた。体育の時間があり健康管理もしっかりおこなわれていた。換金や郵送などの事務手続はすべて現代中国学部の高明潔教授が責任を持ち、職員のかたがたが業務をおこなってくださった。学生が病気になるたびに、徹夜の看病をしてくださった

のも高教授である。学生はこのようなすべての煩雑な事柄を免れていた。私の生涯においてこのように勉学に集中できたのは希有な機会であった。家族の協力、自分を取り巻く人々の協力がなければ実現できなかったことと感謝している。ともあれ中国を自分の目で見、自分の足で歩き、自分の肌で感じることができた。現地プログラムについて書きたいことは数多くあるが、ひとつだけ述べる。

6月上旬の日曜日に私は盧溝橋を見学した。北京の西南を流れる永定河に架かる盧溝橋を私は歴史の教科書でしか見たことがなかった。この機会を逃したなら二度と見学することはできないと思い、北京に向かった。

天津駅は現在改装中なので、天津臨時駅から朝8時の電車に乗って北京へ行った。所要時間は1時間10分ほどである。北京駅からは西に向かう地下鉄に乗った。地下鉄の車内で中年の男女が北京市内の地図を大声で売っていた。それを一枚買って盧溝橋に一番近そうな地下鉄の駅を探した。

勘をつけて「八角」という駅で降り地上に上がった。たまたま一台のタクシーが止まっていたのでそれに乗り込んだ。「盧溝橋に行ってください。」「盧溝橋？ 今から昼ご飯を食べるので行けない。降りてくれ」と言われた。しかたなく降り、道路脇に立って他のタクシーが来るのを待った。5分ほど待っていたが、タクシーは一台も通らなかった。さきほど乗車拒否をした運転手が近づいてきて「しかたない。乗せて行ってやる」と言った。道路が一方通行になっているので盧溝橋と反対方向へしばらく走ってから永定河の土手を南下した。中国では運転席が左にあり、客はたいてい右側の助手席に乗る。私もそれに習って助手席に乗っていた。ひとつの道路で急に止まったかと思うと私の左腿を叩いて「到了」とぶっきらぼうに言った。そこが盧溝橋だった。石の欄干の上には498体の獅子の石刻があった。河には水がなく、初夏の

日差しに盧溝橋は暑かった。見学者はほとんどいなかった。

盧溝橋の東橋詰めに宛平城という村がある。現在そこには中国人民抗日戦争紀念館があった。見学し終え私は、等身大の視点を持つことの大切さを思った。

等身大の視点とは大げさなものではない。私を支えていてくれる家族や顔のわかった地域の人を見つめる視点であり、私を含め、この人たちが殺したり殺されたりすることには耐えられないという視点である。また、私は僧侶になる時戒を受けた。その第一は不殺生戒である。この戒を受けるとき師匠から以下のように三度、問われた。「なんじ佛子、もしは自ら殺し、人を教えて殺し、方便して殺し、殺を讃嘆し、なすを見て随喜し、ないし呪して殺さん、殺の因・殺の縁・殺の法・殺の業あらん。一切有命の者をことさら殺すことを得ざれ。しかるをかえって自恣なる心をもって殺生するは、菩薩の波羅夷罪なり、この戒、汝よく保つやいなや」と、三度、師匠に問われ、三度、守ると答えた。これを守ろうというのが私の等身大の視点である。盧溝橋を渡りながら私の視点をもう一度確認できたのも現地プログラムの成果であった。

2006年4月入学。現在3年次在学中、藤森ゼミに所属

## 現代中国学部という個性

永田真康〈第7期生〉

2003年春、私は現代中国学部に入學をした。そもそも自分がなぜ、この学部での学生生活を決めたのか、というと「やってみたいこと」が明確に自分の心の中にあっただからだ。

高校3年生のとき、自分の将来、自分の進みたい道とは何かを考える機会があった（といっても大学受験なのだが……）。自分が進学した高校は普通科ということもあり、いい意味で、いろいろな道に進む可能性が、他の学科に比べ

て高かった。それまで、まったくと言っていいほど進路のことなど考えたことがなく、当然悩んだ。ふらふらと道筋が定まらない日々が過ぎていった。ある夜、何気なくテレビを見てみると、自分が今まで見たことがないような景色が広がっていた。その番組は中国の秘境九寨溝という場所の特集であった。透き通るような空気と七色に輝く湖が果てしなく続き、その独特の世界に一気に引き込まれた。深夜にもかかわらず数時間、その景色が醸し出す雰囲気少しでも触れようと食い入るように見た。「いつか行ってみたい」。言葉が自然と私の中に残った。

大学入学までは、勉強のための勉強であった。しかし、勉強することに目標ができ、意味が得られるようになった。自分が「やってみたいこと」、それが私をこの学部に引き付けた。その後、北京に留学することが決まり、九寨溝を訪れることができた。かつて、画面上に映し出されていた世界を、自分の五感すべてで感じ取ることができた。

自分が現代中国学部に入った大きな理由は達成することができた。しかし、留學生活の中で新たな「やってみたいこと」を発見できた。北京での生活の中で香港に旅行をする機会があった。そこで初めて広東語というものに実際に触れてみて、広東語に興味を持つようになり、今度は広州への留学を決意した。広州では広東語もさることながら、中国に進出する日本企業、特に自動車業界に興味を持つようになった。中国でも屈指の自動車の街である広州にはトヨタ自動車、本田技研、日産自動車の工場が存在する。運がよかったこともあり、3社すべての工場を見学することができた。

初めのきっかけは「ある場所を訪れたい」、ただそのことのみであった。しかし、そこから次々と新しいことが発見できる。中国にはそんな尽きることのない魅力があるのだと思う。2008年で私の学生生活は終わる（予定であるが）。振り返ると、いつでも何かに目標を持つ

て過ごせたとと思う。もしかしたら、現代中国学部に入學していなくても中国に行くことはできたのかもしれない。しかし現代中国学部に入ったからこそ、ここまで打ち込めたのだと思う。現代中国学部という個性と、他の学校にはないであろう特異な環境が、私を飽きさせることなく、常に次を考えさせる習慣を与えてくれたのだと思う。

2008年3月卒業。現在、岡谷鋼機株に勤務

## 学生生活を振り返って

矢野志奈〈第7期生〉

私は「学生時代は何を熱心に行いましたか？」という問いに「中国です」とはっきり答えます。「行いましたか」という問いに「中国」という答えはちぐはぐで、会話としては成り立ちませんが、それほど中国は私の学生生活に影響を与えたのです。

私は大学1年生の時に初めて中国という世界に触れました。今となっては大変恥ずかしいことですが、中国の国家主席の名前、天安門事件がどういった事件であったのかさえも知らない学生でした。また、中国語に関しても同様に「謝謝」（ありがとう）の正しい発音ですらできていませんでした。このように右も左もわからぬ状態から1年間中国についての基本的な知識を学んでいきました。私にとって、不思議であったのは勉強がまったく苦にならなかったことです。何か一つでも新しいことを知識として得ると嬉しく感じました。こうして得た知識を実際に使い中国に触れてみるという、2年生の時に行われる「現地プログラム」や3年生の時に行われる現地調査は、私の人生の中で何事にも代えがたい貴重な経験となりました。

現在、私はトヨタ系の会社に勤めておりますが、入社してまず教えられたのは何事においても現地現物が鉄則であるという「現地現物主義」

という考え方でした。個人的意見ではありますが、現代中国学部の教育はこの現地現物主義に通じるものがあると思います。私が現地プログラムで4カ月間天津へ行ったのは2004年ですが、この年は日本のメディアで中国の反日感情が取り立たされた時期でした。連日相次ぐ報道に両親を含め、幾人もの友人に「中国へ行って大丈夫なの?」「日本人だと気づかれたらどういった目に合うかわからない」と心配をされ、私自身も初めて中国へ行くということで不安にかられていました。しかし、中国へ実際に行ってみると、日本での報道は何だったのだろうかと思うぐらい平穏な様子で、タクシーに乗る時や、街で買い物をする時に日本人であることを明かしても嫌な顔をされることもありませんでした。むしろ、興味を持って日本の生活や習慣を尋ねてきたりするような好意的な感情で接してくれる方が多かったように感じられました。こうした経験から実際に現地へ行ってみたいとわからないという考え方が生まれました。

また、4年生の時に書いた卒業論文では先生方の圧倒的な知識の豊富さに感銘を受けるとともに、熱心な指導に心を打たれました。私の卒業論文は「野球が中国に定着するのか」というシンプルなテーマでしたが、海外の野球事情や歴史的観点からの検証や野球に限らず文化とはどのように定着してゆくのかなど、多角的方面から物事を捉え検証してゆくということを熱心に指導していただきました。

私にとって現代中国学部は中国についての知識だけを与えるのではなく実際に中国を見て触れるという場も与えてくれる素晴らしい学部でした。中国という一つの大きなテーマに4年間打ち込んだのも、このような場を与えてくれる

カリキュラムと学生が興味を持ったことに対し惜しむことなく指導して下さる先生がいたからだと思います。私はOGとして、一人でも多くの後輩が現代中国学部を通して視野を広げ、学ぶ面白さを知るよう願っています。

2007年3月卒業。現在、アドバンスト・ロジスティクス・ソリューションズ㈱に勤務

## Hommage

矢野貴海〈第10期生〉

中学生の時のことです。地理の授業中、中国が好きかどうかを先生に問われ、はっきりと「嫌い」と答えました。これが自分と中国の関わりの始まりです。嫌いと言った理由は、中国のことを「何も知らない」からでした。「よくわからないけど、好きではないのはたしか」。その程度のことです。それが6年後には、日本で唯一中国を専門としている愛知大学現代中国学部で学んでいるのです。

自分と愛知大学現代中国学部の関わりは、実は高校時代から始まっていました。理由は単純



矢野志奈(左)と矢野貴海(右)

明快で、姉が入学したからです。その中でも思い出深いのは2005年、高校3年生の時です。この年の8月に姉は、武漢への現地調査に参加し、帰国後編集委員として『学生が見た武漢社会』の編集作業をしていました。同

じ班員から提出してもらったレポートを毎日添削していましたが、なかなかうまく行かないようです。弟からすれば、一日中パソコンが占拠されるという危機。結果、「現文が得意」という理由で自分が添削作業を手伝うことになったのです。2008年、今度は自分が仲間と杭州へ

の現地調査へ向けて準備を進めていますが、あの時はもちろん夢にも思いませんでした。

現代中国学部に入って最初の1年は、まさしく中国語漬けでした。春学期・秋学期ともに週5時限ほど、発音からはじまり文法、会話そしてパソコンのピンイン打ちと続きます。自分の場合では、家に帰っても休みはありませんでした。暇を持って余した姉が、「復習」という大義名分でからんで来るのです。散々人をバカにした後、決まって言うのが「早く現プロに行っ来い」「帰国したら中国語で会話しよう」でした。

そして迎えた現地プログラムです。天津に着くと、頭の中は好奇心と不安でいっぱいでした。南開大学へ向かう車窓から見る世界は、自分とは別次元の世界であり、どんどん後方に流れていきます。そんな精神的に追い詰められた状態ですから当然、中国語なんて浮かんできません。昼食のとき「結帳」（お勘定）がわからず、食事が終わってから小一時間ほどお店に居座る始末です。自分がいかに未熟かを確認する、これが現地プログラムのスタートでした。

2007年度の現地プログラムから、新課程の実験班として「特別履修クラス」が設置されました。一日4節の授業を半分ずつ大班（24人）と小班（12人）に分け、前者では主に文法を学び、それを踏まえて後者で会話の練習といった内容です。自分は、事前募集に応募してこのクラスに編入されました。

結論からいうと、このクラスでの体験が他の何ものにも代え難い、大切なものとなりました。学習の面では、授業内容が会話を中心においている点がよかったと思います。特に小班では、話すこと優先でノートを取っていると先生が怒るほどです。実際に人と話すので、相手が次に何を言うのかが予想できないこと、自分で考えながら話さなければいけないことなど会話に慣れていき、学校の外でも会話をするのが恥ずかしくなくなりました。

現地プログラムでの日々は、自分としては

小・中学生時代にとっても似ていたと思います。理由としては、自分の中国語力が小学生のようということと、カリキュラムの中に天津博物館への遠足や愛大生以外の留学生との演劇会があったことが挙げられます。特に劇は、手違いもあり台本作りから本番まで5日でこなさなければなりませんでした。時間的な制約の中、先生とクラスメートとともに夜まで練習をし、前日は徹夜で台本暗記というような“充実した一週間”でした。完成したものは、内容・演出ともに大学生としては稚拙だったかもしれませんが、しかし、小学生としては文句なしのS判定だったとおもいます。そうした日々は、「留学し外国語を勉強している」というようなかたい感覚というより、小・中学生時代の国語の時間のような感覚で過ごせました。こうして学習の面では会話力がつき、生活の面では小・中学生ようにながむしゃらに突き進めたことが、大したストレスやいわゆる「想家」（ホームシック）にならず無事に帰国することができた最大の要因だと思います。

ですが、いつまでも小・中学生のままではいけません。小・中学生から自分をいかに大学生へと成長させていくかが今の課題の一つです。そして現実には、さらに社会人というステップがあります。残りの2年間、現代中国学部が与えてくれるものをつしっかりと自分のものにしてできるよう、日々精進していきたいと思っています。最後にこの場を借りて、現代中国学部を形作ってくださった先生・先輩方、そして現在、現中と自分を支えてくれている友達全員に感謝の意を表したいと思います。謝謝大家！

2006年4月入学。現在3年次在学中、砂山ゼミに所属

## 中国で役者修業——有志者事竟成

山本勝巳〈第8期生〉

歴史、雑技、映画……どれも中国を代表する



ものであり、同時に私の好きなものでもある。だが、それは私が中国について興味があったからというよりは、自分の好きなものがたまたま中国にあっただけというほうが正しいかもしれない。

さて、そんな私だからこの学部を選んだのは至極自然の選択といえると思う。決して学部主催の作文コンクールで優秀賞を取ったので、楽をして合格できるなどの安易な理由ではない。受賞は偶然であり、受賞しなくても、この学部を選んでいて……と思う。

とにもかかわらず、今留学している。場所は北京・中央戯劇学院。中国演劇界の名門であるこの学校を選んだことを機に、私は「鬼子」を演じることとなってしまった。鬼子とは日本兵であり、この半年間でエキストラも含めて4本の映画・ドラマに関わった。

それらの参加作品の中で一番印象深かったのは、CCTV 映画チャンネルで放映されるはずの『围剿』（包圍討伐）である。あらすじは大戦末期、八路軍との決戦に備えて、弾薬庫を探す日本軍と村人とのやりとりを描いた作品で、戦闘シーンなどまったくない。写真は山間行軍中に休憩がてら撮影されたもので、眼鏡をかけたドン臭そうな日本兵（これでも物語り前半の主演）が私の演じた山崎通訳官である。

撮影中のエピソードをいくつか披露したい。「馬鹿野郎！」とロケ地である山西省のド田舎で子供に怒鳴られた。彼らが知っている唯一の日本語がこれであり、他にも謎の日本語「ミシミシ」（飯！ 飯！）、「スラスラ」（死ぬぞ、死ぬぞ）などが存在する。ちなみにすべてのロケ現場で上記のような現象が発生したので、山西省に限ったことではない。

これらの言葉は抗日作品から学んだもので、子供から大人までものすごい影響を誇っている。みなさん訪中時に、聞きなれない日本語にであつたら、きっとこの系統から発生した間違った日本語です。真剣に考えるのは止めま



後列右から二人目が山本勝巳

しょう。

この現場で白酒片手に飲み、吐きながら中国人と歴史問題を話し合うことも多々あったが、予想以上に日本側の主張に理解を示してくれたことが自分にとって大きな発見であった。抗日作品全体にこの風潮、つまり戦争により狂っていく日本兵の写実的描写が差し込まれるようになり、これまで中国人のイメージにあったひたすら「鬼」としか形容し難い日本兵はなくなりつつある。

一方で、日本人像を「鬼」にしたてあげている虐殺場面は依然として存在している。撮影上、私も一人を射殺し、一斉射撃のシーンにも参加した。日本に対しては、一面理解と一面警戒という中国政治は、芸術・文化面でもその影響力を誇示していることを身を持って学べた。今後も抗日作品は、どう形を変えようとも、ずっと製作されつづけるだろう。

最後に、役者経験など小学校のお遊戯会まで遡らなければならない私が、何故「鬼子」を演じたかということ、好奇心の一言に尽きる。外から歴史問題を見るのではなく、内の内まで入り込んで実情を見たかっただけなのだ。次やるなら、李連傑（ジェット・リー）と功夫映画か、さもなければ王心凌（シンディー・ワン）と恋愛ドラマで競演したいというおめでたい考えをもっている。誰もが思い描いて、形にすることのできない夢を形にするため、残りの学生生活

を頑張りたい。楽しんで合格させてくれた学部のためにも。

2006年9月から1年間、北京の中央戯劇学院に留学。  
現在、在学中

## 留学生から見た現代中国学部

劉贊玥〈第8期生〉

「何であんたは中国人なのに、現代中国を勉強するの？」

これは、最初に愛知大学現代中国学部を選択した時の、周りからのよくある疑問の声でした。

私は、2002年10月に中国の江蘇省南通市から九州の熊本のYMCA日本語学校に入学しました。1年半の勉強を終えるころ、国に帰るか日本で進学するか、迷っていました。その時、たまたま見た留学生新聞の一面に現代中国学部の紹介がありました。「現代中国学部は、総合的に中国を理解するために、中国語とともに、政治、経済、文化、ビジネス、国際関係などさまざまな角度から中国を学ぶことのできる日本で唯一の学部です」と書かれていて、面白い学部だなと思いました。これをきっかけに、愛知大学と現代中国学部のことを調べ始めました。現代中国学部は、愛知大学の伝統である中国研究と、現地インターンシップなど現在の社会の要求に応えるプログラムを取り入れた学部で、中国の研究者も来日して講義をしているし、大学院では諸外国の中国研究者を招聘して盛んに研究を行っている大学だとわかりました。

日本に来て、自分の国に関する知識があまりにも少ないとわかりました。実際に、アルバイト先の日本人や日本人の友達からいろいろなことを聞かれ、答えられずに恥ずかしかったことが何回もありました。自分の母国のことをもっと知りたい、そして、中国のことも日本のこともよく勉強して、もっとたくさんの人たちに伝えたいと思いました。「自分の国と言っても客

観的にはとらえにくい。他の国からなら、自分の国がもっと客観的に見えるだろう」。これが現代中国学部を選んだ理由でした。

現代中国学部で4年間勉強して、もっとも印象的なのは、現地重視の教育です。この独特のプログラムが文部科学省により「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択されています。このプログラムで日本人の学生たちが実際に中国のいろいろなところに行って現状を把握し、そこから中国についてもっと興味を深めています。

また、専門知識についても、現代中国をトータルに把握することができる科目群が編成されていて、中国や台湾から優れた学者や研究者を専任教員として招き、その考えや見方も認識できるので、より真実に近づくことができます。これは中国人学生にとっても中国ではなかなか経験できないことです。

そして、現代中国学部には中国現地研究実習というカリキュラムがあり、調査テーマごとの班に分かれ、3週間にわたり中国の農村や企業、家庭などを訪問し、生きた知識を体得します。そういうカリキュラムのお陰で、日本人学生と中国人学生がより近く触れ合い、中国に対する認識を深めることができます。

以上が私の目から見た現代中国学部の魅力です。この環境の中で中国について学びながら、現代中国学部を選択したことの正しさを改めて確信しました。そして、現代中国学部にさらに引かれ、ますます好きになっています。

でも、大学生活を始めたころ、日本人学生と接する機会が多くなって、日本と中国の人々がお互いにわかりそうでも実際はわからないということがいっぱいありました。日本と中国、地理的には近いのですが、実は遠いとも言えます。顔を見ただけでは中国人と日本人の区別はつかないし、また両者とも同じ漢字を使っています。そのためお互いに中身も簡単にわかると思ってしまうようです。しかしながら、表に現れない

考え方や習慣などについては、かなりの違いがあると思います。

現代中国学部のいろいろな授業から、中国について、政治、経済、文化、歴史など多様な角度から見ることができました。そして、日中間の問題も浮き彫りになりました。歴史認識、中国脅威論、反日感情……。二国の間にさまざまな障害が溜まり、断片的に流れる情報に煽られ、サッカーアジアカップ事件に引き続き、2006年に入ってからはデモもありました。「こっちの気持ち、何でわかってくれないの！」夫婦喧嘩でよく聞こえてくる叫び声が中国からも日本からも、聞こえて来ようです。

にもかかわらず、私はそうした困難を乗り越

えていこうという使命感と責任感を強く持っています。私は、現在、日本の会社への就職が内定しており、これからより多くの日本人と交流する機会が増えていくと思います。そこでも、日中間のいろんな摩擦が出てくることでしょう。そんなとき、大学での専攻を生かし、両国の文化、習慣などを知っているという強みを最大限に使いたいです。日中の企業間の摩擦を取り除き、ビジネスを円滑にするための役割を果たせれば、と思っています。

ビジネスを通じて、長い歴史を持つ日中の人と文化の交流に貢献したいと思います。

2008年3月卒業。現在、敷島製パン(株)海外事業室に勤務